

家庭(裁縫・家事)教科書

はじめに

家庭生活に関する学習は、明治以前からも行われており、私塾で裁縫、礼儀作法などが教えられていた。1872（明治5）年の「学制」公布後、学校教育の中で家庭生活に関する学習は「裁縫科」と「家事科」という2つの教科で進められた。

1 「学制」期 1872～79（明治5～12）年

（1）裁縫教育

「学制」では、小学校の普及と充実に重点がおかれ、尋常小学校、女児小学校、村落小学校など数種を認めている。その中で、女児小学校では「女児小学ハ尋常小学教科ノ外ニ女児ノ手芸ヲ教フ」とあり、裁縫教育は「手芸科」として出発した。「学制」は欧米の教育制度を参考にしてつくられたもので、そのため「手芸科」は従来からの裁縫以外に、西洋の編物やししゅうが教えられることを想定していたと思われる。しかし、実際には和服の裁縫を中心とする教育であった。



図1 『小学裁縫道しるべ』1874（明治7）年

「学制」期の教科書である『小学裁縫道しるべ』1874（明治7）年（図1）は、最も早い時期の裁縫教科書で、教師用に書かれたものである。和服製作のための用具の説明から始まり、その製作方法について述べているが、「衣裳の裁ち方、縫い方、針の止め方を知るための解き方」という項目が含まれている。衣服を解くことによって、縫い方や裁ち方を理解させようとしたものである。

（2）家事教育

「学制」期には「家事科」はなかったが、「学制」と共に公布された「小学教則」において、下等小学6級（現在の第2学年前期）の「読本読方」（読物科）の教科

書として片山 淳之助^{かたやまじゆんの すけ}『西洋衣食住』1867（慶応3）年があげられている。この教科書は、家事教育のためというより、西洋についての知識をもたせるための教材であった。その後、外国の翻訳書が読物科の教科書として用いられ、村田文夫訳『子供育草』1874（明治7）年、近藤^{こんどう}鎮三^{ちんぞう}訳『母親の心得』1875（明治8）年（図2）、『育児小言』1880（明治13）年、永峯秀樹^{ながみねひでき}訳『経済小学家政要旨』1877（明治10）年などが出版された。

『子供育草』の原著は、米国ヒラデルヒア（現在の表記ではフィラデルフィア）州医学校の医師、小児科・産科兼任のエフ・エッチ・ゲッセル氏の著述であり、緒言に1868年に米国議会の許可を得たものであると書かれている。この教科書は当時では珍しく挿絵入りである。挿絵の中には、出窓のある洋風の部屋で、椅子に腰掛けてくつろぐ、和服に日本髪のもとの母親と子どもの姿がみられる。原著の絵を日本風にアレンジしたものと思われ、当時の日本では一般にはみられなかった光景であろう。

『母親の心得』はその前書きに、ドイツのクレンゲ博士の『ムッテル・アルス・エルチヘリン』という原書にハルトマン氏の養生説を加えて訳し、二巻としたとある。前篇は妊娠中の摂生、分娩の心得、小児養育の心得、疾病看護の方法、後篇は精神の教育について書かれている。

『育児小言』は、1875年にロンドンで発刊された『アドウアイス・ツウ・エ・マーザ』（英語やドイツ語の発音そのままをカタカナで表し、しかも筆で縦書きされているのには奇異な感じがする）を翻訳したものと記されている。原著は医師パイヘンリーチャアス氏が多年の実験によって発明した育児法を著述したもので、英国帝室の産科侍医サー・チャレス・ロコック氏が訂補したとある。

初篇には、乳児の洗浴、さい帯、衣服、飲食及び乳婆、種痘、歯、運動、睡眠、小児病気に関することが書かれ、二篇には、幼児の家居、遊戯、児童病気、予防法、教育が書かれている。ミルクの説明に製造会社名まで示したり、育児に関わる各項目を具体的、専門的に詳しく述べている。

『経済小学家政要旨』は明治10年代に最も普及した教科書といわれ、原著は1875年にニューヨークで出版されたハスケルの著書である。原著には調理の内容も含まれていたが、日本では用いられないので訳出していないと記している。当時の日米に

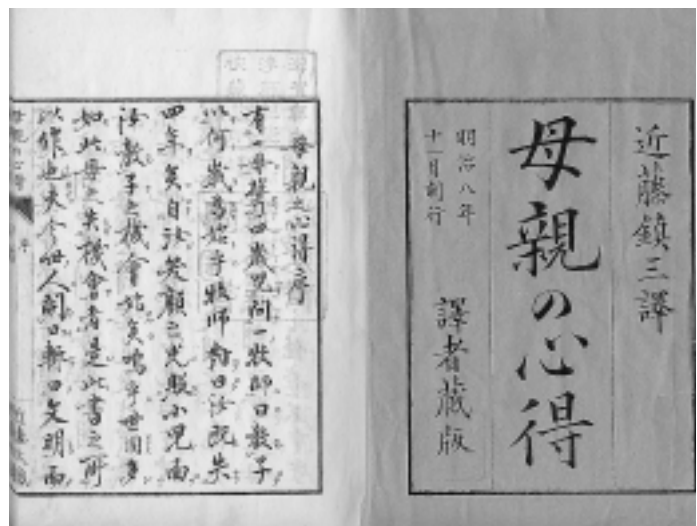


図2 『母親の心得』1875（明治8）年

おける食生活の違いがいかに大きかったか想像できる。総論と各論があり、各論では、家屋家財を買い求める時の心得、雇人の取扱い方、料理の経済、洗濯熨斗（うっと；炭火を盛り、熱で布のしわをのばすアイロン）、来客を待遇する心得、夫の心得、栄養のこと、食物の心得、食料を買う時の心得、病室、家中薬方、^{えいじ}嬰兒についての心得、嬰兒輕症の諸患がとりあげられている。

これら翻訳本の内容は、当時の一般的な家庭生活とはかけ離れた部分が多く、一般家庭で役立つものではなかった。しかし、裁縫教育とは別に、家庭生活に関する学習が行われたことは、その後の家庭科教育の形成にとっては重要であった。

2 「教育令」期 1879～86（明治12～19）年

1879（明治12）年に、政府は「学制」を廃止して、「教育令」を公布した。1880（明治13）年には「改正教育令」を、1881（明治14）年には「小学校教則綱領」を定め、小学校教育の整備を図った。

（1）裁縫教育

「教育令」では、「女子ノ為ニハ裁縫等ノ科ヲ設クヘシ」として、手芸科にかわって「裁縫科」が設けられた。「小学校教則綱領」で小学校を初等（3年）、中等（3年）、高等（2年）の3等に分け、「裁縫ハ中等科ヨリ高等科ヲ通シテ之ヲ課シ 運針法ヨリ始メ漸次通常ノ衣類ノ裁チ方、縫イ方ヲ授クヘシ」として、小学校中等科と高等科（第4学年～第8学年）に「裁縫科」を課した。各学年での学習内容と授業時数が示され、毎週3時間が裁縫科に当てられており、最終的には羽織、帯、袴に至るまで、和服製作の高度な技術が習得できるようにしていた。

この時期の教科書として^{わたなべたつごろう}渡辺辰五郎『普通裁縫教授書』1880（明治13）年、玉木一『小学裁縫書』1883（明治16）年などがある。裁縫教科書のほとんどすべては、教師用の教授書か参考書として出版された。裁縫は技能の教育であり、教科書によって教える性質のものでなく、生徒用教科書を必要としなかった。裁縫科の生徒用教科書は、1942（昭和17）年の国民学校の教科書まで刊行されることはなかった。

（2）家事教育

「学制」期に読物科で扱われていた家庭生活に関する内容が、「小学校教則綱領」で独立した教科となり、「家事経済科」として小学高等科（現在の中学第1、2学年）の女兒に設けられた。アメリカのホーム・エコノミックスを訳出した教科名である。「家事経済ハ高等科ニ至テ之ヲ課シ、衣服ノ洗濯、住居^{じゅうき}、什器^{かっぼう}、食物^{すいとう}、割烹、理髪、出納等一家ノ経済ニ関スル事項ヲ授クヘシ、凡裁縫、家事経済ヲ授クルニハ、民間日常ニ応センコトヲ要ス」とされた。

前田寅七郎編『婦女必読家事要訓』1881（明治13）年、藤田久道編『家事経済論』1881（明治13）年、^{くさか べさん}日下部三之助編『小学家事経済訓蒙』1883（明治16）年などの教科書が作成され、文部省の許可を得て出版された。これらは「学制」期の翻訳教科書に準じながら、わが国の日常生活に合った内容となっている。たとえば、『小学家事経済訓蒙』

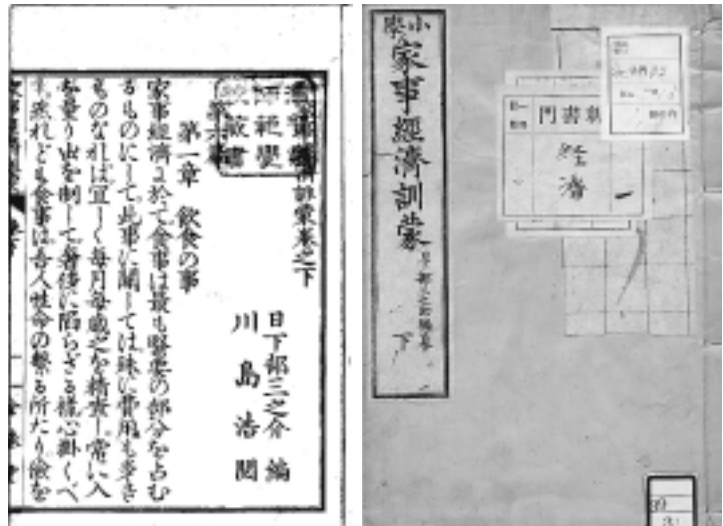


図3『小学家事経済訓蒙』1883（明治16）年

下巻（図3）では、日本の食品の味噌、醤油、酒、茶などが取り上げられ、調理も米飯や煮る・焼く・蒸すという調理方法について述べている。また、家計の収支と帳簿記入方法といった家庭経済の内容や、理髪についても書いている。

「男子の理髪には結髪と散髪があり、散髪が近來の流行である」

「女子が理髪を自分でできないのは恥ずべきことであるが、近來これを恥とする人が少なくなった。常に理髪師にしてもらうことが一般の風習となってきたようである。都会に住んでいる婦人に特に多い。これは女子の務めを知らず、一家の経済を顧みないものである」

「髪を整えるのには時間がかかるので、よく注意して家事がおろそかにならないようにしなければならない。何度も髪を結い直して半日から一日を浪費するのは実に恥ずかしいことである」

理髪では、日本髪から現代の髪型へと移行する当時の状況を非難をこめて述べている。家庭における生活技術の一つであった理髪が、家庭の仕事から離れていくようすが分かる。

3 「小学校令」期 1886～1941（明治19～昭和16）年

1886（明治19）年に「小学校令」が公布され、小学校は尋常と高等の2段階に分かれ、尋常小学校は義務教育となり、その後55年間続いた。裁縫科は高等科女児の必修となったが、尋常科では省かれることになった。しかし、裁縫科に対する要望が強く、翌年地域の状況に応じて尋常科にも裁縫科の設置を認めている。

一方、1881（明治14）年に設けられた「家事経済科」はわずか5年でなくなり、1910（明治

44) 年の改訂で理科の一部として復活するまで姿を消すことになる。また同時に、教科書は文部省の検定済の教科書だけを使用させる検定教科書制度が実施された。その後、1902（明治35）年の教科書疑獄事件を期に1903（明治36）年には小学校の教科書は文部省が著作権をもつことになり、翌年1904（明治37）年4月から国定教科書制度を実施した。

（１）裁縫教育

1891（明治24）年、「小学校教則大綱」で「裁縫科」の教授要旨が示された。内容は従来の

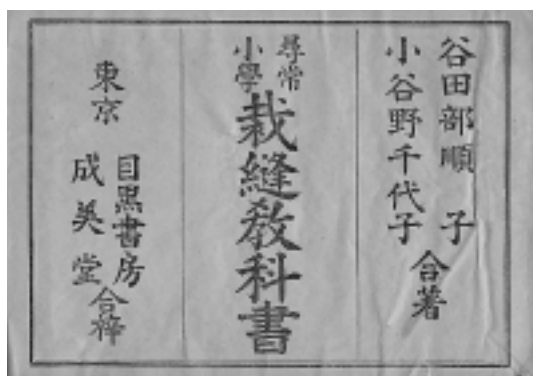
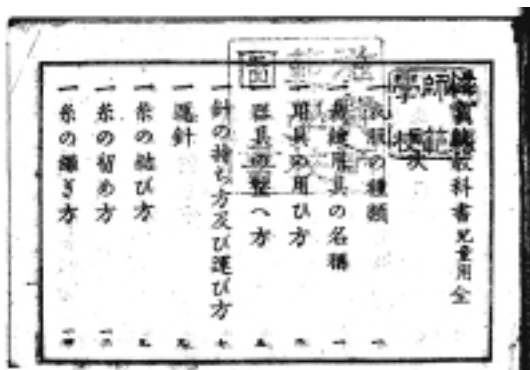


図4 『尋常小学裁縫教科書児童用』1903（明治36）年

衣類の縫い方及び裁ち方が中心であったが、「家事経済科」がなくなったことから家事科の内容である洗濯や保存が加わり、節約利用の習慣形成というしつけ面が加わった。この時期には、樋口米子『新式裁縫教授書』1892（明治25）年、渡辺辰五郎『裁縫教科書』1897（明治30）年、谷田部順子『裁縫教科書』1897（明治30）年、谷田部順子・小谷野千代子『尋常小学裁縫教程教師用』1903（明治36）年などの教師用の教科書が出版された。

『高等小学裁縫教程生徒用』、『尋常小学裁縫教科書児童用』（図4）は、当時では珍しい生徒用の教科書である。図5は『尋常小学裁縫教科書児童用』の中に入っている挿絵で、針の持ち方、運び方、姿勢を示したものである。この児童用教科書には、文中の漢字に読みがなが付けられている。



図5 『尋常小学裁縫教科書児童用』より「針はこびの姿勢図」

1907（明治40）年に「小学校令」が改正され、尋常小学校の年限が4年から6年になり、裁縫科が女児の必修科目として第3学年から課されることとなった。この年の女児の小学校就学率は9割を越えており、裁縫教育は全国に普及していたことになる。大正から昭和へと時代が移り、裁縫科の教材も和服から洋服、ミシン縫いへと変化していった。また、1924（大正13）年にメートル法が施行され、

教科書の中の寸法もメートル、センチメートルで表示されるようになる。1919（大正8）年発行、1924（大正13）年印刷の『裁縫新教科書』はちょうど過渡期のもので、本文中では尺を使い、巻末に尺とメートルの対照表を付け加えている。

（2）家事教育

「家事科」は、1886（明治19）年の「小学校令」で廃止された。しかし、1911（明治44）年に高等小学理科の授業時間のうちの1時間を、女兒のための「家事の大意」の学習に当て、「理科家事」として復活した。1914（大正3）年に国定教科書『高等小学理科家事教科書』（図6）第1学年児童用と教師用が発行され、1915（大正4）年に第2学年用が、1916（大正5）年に第3学年用が順次出版された。「家事経済科」の教科書と比べると、理科教育の影響を受けて科学的な傾向が強くなり、調理実習が多くとり入れられ、技能面の学習が強化された。

第1学年は主に、住居管理、被服管理と家庭看護の学習である。第2学年は1学期が基本的な調理、2学期前半が食品とその管理、2学期後半と3学期前半が保育、最後に家庭経営の学習となっている。中には、飲料水に関する学習があり、家庭での浄水方法として煮沸法と濾過法を説明している。水道の水は多くの費用がかかっているので濫用しないようにとある。第3学年は季節に対応させた行事食の学習や、1、2学期の一部に被服の洗濯の学習が入っている。冠婚葬祭時の贈物のしきたりに関する学習や季節の家事と年中行事に関する学習もとり入れられている。

その後、家事科は1919（大正8）年に理科から独立して高等科女子の選択科目となり、1926（大正15）年には必修教科となった。『高等小学家事教科書』は1933（昭和8）年に発行された国定教科書で、教師用と児童用がある。

どの学年も食物領域の学習が多くなっている。繊維と織物、食物の成分、井戸と水道、人造絹糸織物などの科学的内容が多くとり入れられた。家庭生活の合理化、女子と家事、敬老などに関するものも含まれている。この時期の教科書は、科学技術の発達にともなう生活の変化や、当時盛んだった生活改善運動を反映している。教科書中の表現も『高等小学理科家事教科書』では「割烹心得」としていたのに対し、『高等小学家事教科書』では「料理法の概説」と変わり、取り扱う調理も以前にはみられなかったカタカナの名称が並んでいる。たとえば、「カレーライス、サラダ、サン



図6 『高等小学理科家事教科書』1914（大正3）年

ドヴィッチ、キャベツ巻、ドーナツ、コロッケ、スチュウ」などである。

4 「国民学校令」期 1941～47（昭和16～22）年

1941（昭和16）年に「国民学校令」が公布され、小学校は国民学校へと名称が改められた。裁縫科と家事科は、この法令により「芸能科」に含まれることとなった。

（1）裁縫教育

1942～43（昭和17～18）年に、明治以来初めて裁縫科の児童用国定教科書が発行された。『初等科裁縫』上・中・下の3冊で、国民学校初等科の第4学年から第6学年まで各学年1冊をあてたものである。裁縫科は教科書を用いないとされてきたので、教科書の発刊は画期的なことであった。技術学習に加えて、家事科に含まれていた被服管理の学習が取り入れられ、衣生活全般を指導するように変わった。「あもん袋」など時局を表す内容もみられた。

（2）家事教育

「芸能科家事」は高等科におかれ、1944（昭和19）年に国定教科書『高等科家事』上（第1学年用）が発行された。被服に関する内容は芸能科裁縫に移され、「祭事」「敬老」の内容や「わが国の家と女子」「家庭防空に対する心構へ」「皇国の経済と一家の経済」など、社会情勢を反映した内容が加わった。下巻は1945（昭和20）年に編纂されたが、戦時下のため発刊されなかった。

（3）暫定教科書

敗戦直後、文部省は応急措置として、それまで使っていた教科書に敗戦後の新事態に応じた修正と削除と補充とを加えたものを新しく刊行した。これが1946（昭和21）年度1年限りの暫定教科書（図7）である。当時の紙不足と急を要したことから、紙質が悪い新聞用紙に印刷され、表紙らしい表紙もなく、2、3カ月分を分冊にした折本、または仮綴のものであったので、パンフレット、折りたたみ本、タブロイド、分冊教科書などと呼ばれた。この暫定教科書は散逸し、幻の教科書とも言われている。

「芸能科裁縫」では、『初等科裁縫』（第4・5・6学年；5分冊）及び『高等科裁縫』（第1・2学年；4分冊）、「芸能科家事」では『高等科家事』（第1・2学年；8分冊）が暫定教科書として出版された。これらの教科書の内容は戦前のものとはほぼ同じであるが、『初等科裁縫』では戦前の教科書の内容から「あもん袋」「針くやう」「織物」を省いたものとなっている。また、『高等科家事』上では戦前の「わが国の家と女子」が「家事と女子」に変わり、「祭事」「家庭防空に対する心構へ」が削除され、戦前に発刊されなかった下巻が、第2学年用として

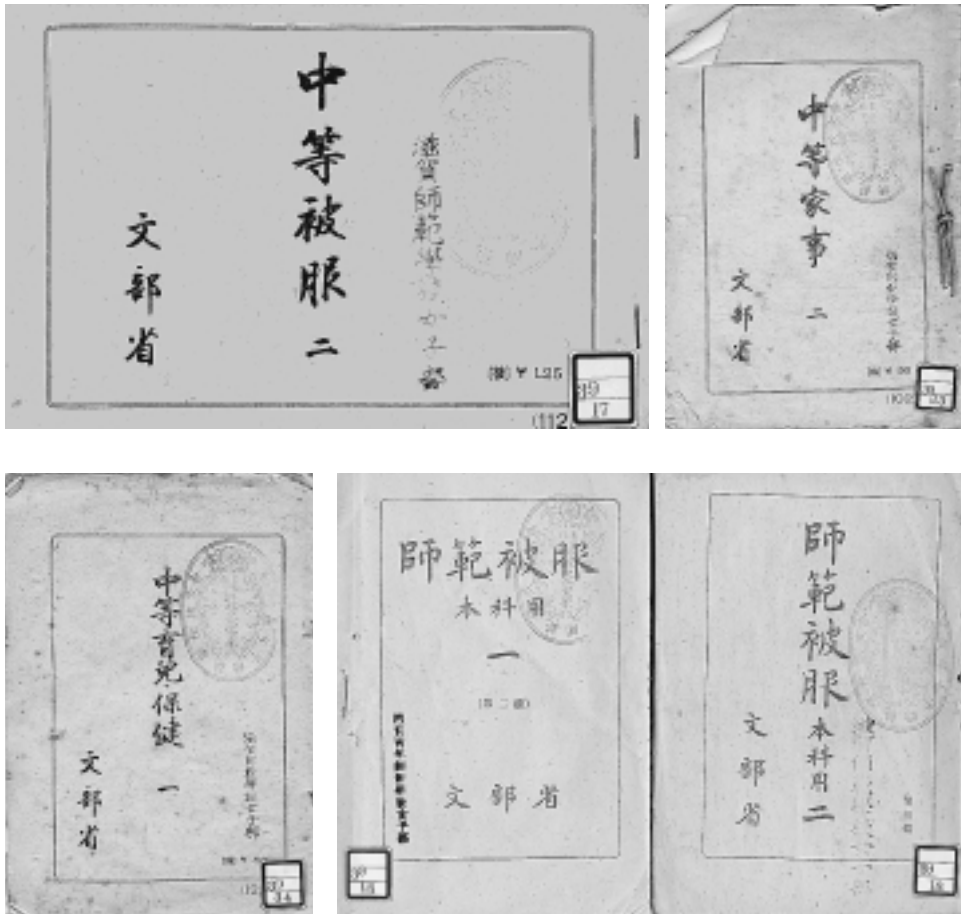


図7 暫定教科書類

発行された。

これらの教科書はすべて連合国軍総司令部民間情報教育局（GHQ／CIE）の検閲を受け、「APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION（日付）」という英語が扉または奥付に印刷された。この検閲制度はしばらく続くことになる。

（松村 京子）